

インターネットの普及による 日本のテレビドラマ制作の変化と課題

21540150 峰岸愛

目次

はじめに	3
第1章 テレビドラマの歴史.....	3
1-1. テレビの誕生とテレビドラマの定義	3
1-2. 日本のテレビドラマの成り立ちと特徴.....	5
第2章 ネット普及前後のヒット作の違い.....	9
2-1-1. 脚本家の変遷	9
2-1-2. 2020年代活躍する脚本家の特徴	14
2-2. 視聴率重視から配信再生回数重視へ	14
第3章 宮藤官九郎と野木亜紀子の作品はなぜ支持されるのか.....	17
3-1. 宮藤官九郎が評価される理由	17
3-2. 野木亜紀子が評価される理由	21
第4章 SNSの影響力と制作の変化.....	22
4-1. 現代人に合わせた映像構成.....	22
4-1-1. タイパによる視聴方法の変化.....	22
4-1-2. OP映像、ED映像のカット	23
4-2 : 公式アカウントの活用	25
4-3 : 視聴者の意見に左右される制作陣	26
おわりに	27
参考文献	28
インターネット文献	28
参考映像.....	29
参考テレビドラマ作品.....	29

はじめに

1940年に日本のテレビドラマの誕生のきっかけとされる『夕餉前(ゆうげまえ)』が制作されてから今年で84年。現在に至るまで様々なテレビドラマ作品が時代を彩り、人々を熱狂させ、感動を与えてきた。1980年代から90年代はまさにテレビの黄金期であり、テレビドラマも高視聴率を記録するなどテレビが大いに盛り上がった時代であった。しかし21世紀に入り、急激に普及していったインターネットによってSNS(ソーシャルネットワークサービスの略)や配信サービス、スマートフォンも次々と登場した。それまでトレンドであったテレビ離れが加速していき、テレビ離れとともにテレビドラマ離れも進んでいる。

かつて、テレビドラマのヒット作の定義の大前提として、視聴率が高いことがあげられていたが、今ではドラマ以外にもバラエティ番組などのテレビ自体の視聴率が低いいため、単に高視聴率の作品は評価が高く、話題になった作品とは定義づけられないという現状である。

一方で、視聴率が取りづらくなった2010年代以降であっても、話題となった作品は数多く存在している。例えば、2013年にユーキャン新語・流行語年間大賞を受賞したNHKの連続テレビ小説『あまちゃん』とTBSの日曜劇場『半沢直樹』は両作とも平均視聴率が20パーセント越えをしているが、当時インターネット内でも劇中のセリフや登場人物が話題に上がることが多く、幅広い層から支持を得て国民的ヒット作になっていったと考えられる。また、視聴率が取れずともコアなファン層によって支えられ、映画化までされるほどの作品となった『SPEC～警視庁公安部公安第五課 未詳事件特別対策係事件簿～』(2010)をはじめ、近年ではコア層に向けた作品展開や公式SNSアカウントの活用方法の多様化も進んでいる。

以上の事から、本稿では時代の流れとともに、日本のドラマ制作がどのように変化していったのかについて多くの作品に触れながら、現代のテレビドラマのヒット作の定義について考えていく。第1章ではテレビドラマの歴史に触れ、第2章ではネット普及前後のヒット作の違い、第3章では近年のテレビドラマで支持されている脚本家の宮藤官九郎と野木亜紀子の作風について、第4章ではSNSの影響力による制作の変化について順に論じていく。また、ネットの影響によって1990年代ごろまでと違い、どのような課題が生まれたのか、多角的に分析していきたいと考える。

第1章 テレビドラマの歴史

1-1. テレビの誕生とテレビドラマの定義

テレビドラマとは、テレビでの放送を目的に制作された演劇や芝居を指す。テレビドラマの誕生には当然テレビの誕生や普及が関係している。テレビ誕生の背景としてスコットラ

ンドの発明家、アレクサンダー・ベインが画像を走査、電送する装置を開発した事が始まりである。その後 1896 年にグリエルモ・マルコーニが無線通信を、1897 年にフェルディナント・ブラウンがブラウン管を発明し、テレビの技術が進化していく。そして、1926 年には「テレビの父」と呼ばれる、日本人の高柳健次郎が世界初のテレビによる電送と受像の機能を実用レベルで成功させる。テレビ放送の開始は 1929 年の英国放送協会(BBC)が最初に行い、次第に世界中でテレビ放送と共に放送元のテレビ局の設立も増えていった。

日本のテレビの歴史については、NHK 公式ホームページの「テレビ放送の歴史」と岡室美奈子著の『テレビドラマは時代を映す』に依拠して振り返っていきたい。日本では 1939 年に日本放送協会(NHK)が初めてのテレビ公開実験を行うも、戦争で中断する。戦後の 1948 年に再度公開実験を行い、1953 年 2 月に NHK が本放送を開始した。同年 8 月には民間放送初のテレビ局として日本テレビ放送網が開局し、本放送を開始した。その他の在京テレビ局については 1955 年に TBS テレビ、1959 年にテレビ朝日とフジテレビ、1964 年にテレビ東京がそれぞれ開局している。この頃シャープが国内で初めてテレビを生産したが、当時はかなり高価だったこともあり、テレビを持っている人は少なかった。当時テレビは駅前や公園に設置され、街頭テレビとしてみんなで集まって観るとというのが当たり前だった。スポーツ中継、コンサート、舞台などのライブ映像を各地の映画館や広場で行われるライブビューイングと言われる現在の姿形は違えど街頭テレビと同じ感覚に近いだろう。大勢の人々と集まって一つの映像を鑑賞するのは昔から変わらないのかもしれない。

日本の高度経済成長期とともに白黒テレビ受像機も増え、着々と一般家庭に普及していった。1959 年 4 月の皇太子ご成婚の頃には 200 万台を突破し、ご成婚の様子は大規模中継され約 1500 万人が視聴したと言われている。翌年の 1960 年にはカラーテレビ放送、1963 年には日米衛星実験が開始されるが、当時太平洋を挟んで日本に届いた映像は当時のアメリカ大統領ジョン・F・ケネディ氏の暗殺事件であり、人々に衝撃を与えた。1964 年には東京オリンピックが開催され、世界で初めてオリンピックが生中継された大会となった。開会式や閉会式、8 競技がカラー放送され、スローモーション VTR が導入されるなど、テレビ放送の技術が進歩した年となった。1970 年には大阪万博が開催され、会場からの生中継が人気となり、1971 年 10 月に NHK 総合テレビでは全放送時間をカラー放送にした。1972 年 2 月に発生した「あさま山荘事件」では長時間生中継され、NHK と民放合わせて最高視聴率 89.7%(ビデオリサーチ、関東地区)を記録し、多くの注目を集めた。同年の札幌オリンピックでは全世界で生中継され、1979 年には南極大陸からのテレビ中継も成功した。NHK では 1989 年に衛星放送本放送を開始し、1991 年には高解像、高精細画質なハイビジョン放送の時間枠を増えていく。2003 年には東京タワー、大阪生駒山、愛知県瀬戸タワーの各地からデジタル電波が発信され、地上デジタル放送が始まった。2011 年にはアナログ放送が終了し、全てのテレビ放送がデジタル放送へと変更された。また、2000 年代中頃からテレビ局各局で有料オンデマンド配信サービスが始まり、見逃した番組や懐かしい番組も見られるようになったが、2015 年 10 月には在京キー局 5 社主導による無料見逃し配信サービス

「TVer」がスタートし、お金を払わずとも期間限定で見逃した番組も視聴できるようになるなどインターネットを利用した新しい機能も登場した。

1-2. 日本のテレビドラマの成り立ちと特徴

日本のテレビドラマの始まりは、1940年にテレビの本放送が始まる前の実験放送で流れた『夕餉前(ゆうげまえ)』だとされている。同年には第二作『謡と代用品』が放送されたが、太平洋戦争が始まったため、実験放送は中止となった。その後、1953年に本放送が始まると、1958年6月に大阪テレビ放送(OTV、のちのABC)にて『ちんどん屋の天使』が放送され、これが日本のテレビドラマにおいて初のビデオテープレコーダ(VTR)が使用された作品となる。ビデオテープがある事によって、これまで生放送などにより手元に残らなかった作品が多くあったが、この作品後から保存される事が多くなった。同年10月にはラジオ東京テレビ(KRT、のちのTBS)の『私は貝になりたい』にて本格的なビデオ録画放送が実用化された。前半はVTR、後半は生放送という形で放送され、日本のテレビドラマの技術的な革新がみられた。しかし、テレビ草創期の番組のほとんどは生放送だったため、セットが壊れたり、俳優がセリフを忘れ次週に持ち越しになるなど現在なら放送事故ともいえる生放送ならではのハプニングがつきものだったという。現在、バラエティー番組であっても収録がほとんどである今日、生放送のテレビドラマは映像の舞台作品を観ているような新鮮味が感じられるだろう。

現在も続くドラマ枠で一番古いのは1956年に放送開始された日曜21時枠のTBSの「日曜劇場」である。1961年にはNHKの朝の連続テレビ小説(通称、朝ドラ)『娘と私』、1963年にはNHKの大河ドラマ『花の生涯』が放送開始となり、日本を代表するドラマ枠がこの頃から出てくるようになった。朝ドラは当時昼と夜のみでの放送だったテレビを忙しい朝の時間帯にも見てもらえるよう主婦向けに考えられた企画だった。1950年代、ラジオで毎朝小説家の書下ろしを朗読する5分間の番組や1958年の『バス通り裏』という連続ドラマが平日19時15分から30分の15分間、週に5日放送されていた事をヒントにテレビドラマとして制作された。また、ラジオの名残や忙しい朝の時間帯のためテレビを観られず、家事をしながらの視聴者に配慮してなのか、他のドラマに比べ朝ドラにはナレーションが多いのも特徴である。そして当時、オリジナル作品を一年間書ける脚本家はほぼおらず、ラジオドラマの再構築という形で1961年4月に連続テレビ小説の第一作『娘と私』が月曜から金曜の8時40分から20分間で放送開始となり、第二作『あしたの風』(1962)からは土曜も増え、8時15分からの15分間の放送となった。第五作までは家族がテーマの作品がほとんどだったが、第六作の『おはなはん』(1966)からは女性の成長物語を描くスタイルが平均視聴率45.8%を記録するなどの評判を呼び、この作品のスタイルは現在の朝ドラの礎を築いた。第15作『水色の時』(1975)からは半年の放送となり、東京と大阪交互での制作となった。再度

1年間放送した作品は最高視聴率 62.6%を記録し、現在もテレビドラマの最高視聴率記録を保持している『おしん』(1983)である。テレビ本放送 30周年を記念にして作られたこの作品は日本だけでなく、シンガポールやタイなど世界各地で放送され大ヒットとなった。また、基本的には女性の若手俳優が主人公として描かれることが多い朝ドラだが男性が主人公の作品もこれまでに何作か制作されており、『ロマンス』(1984)からは青年の男性主人公による成長物語が描かれ、『心はいつもラムネ色』(1984)『いちばん太鼓』(1985)『凜凜と』(1990)『走らんか!』(1995)『マッサン』(2014)『エール』(2020)『らんまん』(2023)『あんぱん』(2025)などがあげられる。どんな時代でもひたむきに前に向かって進む朝ドラヒロインたちの姿は現在も変わらず視聴者の心を掴んでいる。

朝ドラと同様にNHKドラマの二大看板の大河ドラマはテレビドラマが軽視されていた時代に“映画に負けない、日本一の大型時代劇”を目指し、制作された。映画全盛期、俳優や監督たちは大手映画会社に所属しながら活動していた。しかし、各社専属俳優、監督の引き抜きを恐れた映画会社は1953年に松竹、東宝、大映、新東宝、東映の五社による五社協定を締結し、俳優や監督は所属している会社が制作した作品以外携わることができなかった。大河ドラマはそのような状況の中でテレビドラマにもスター俳優に出演してもらおうべく、交渉にあったが協定によって困難を極め、契約が無い歌舞伎俳優や舞台俳優に頼らざるを得なかった。第一作『花の生涯』で主演を務めた尾上松緑は歌舞伎の公演を休まないことを条件に出演を許可し、日中公演をおこなった後の夜10時過ぎに現場に入り、深夜にかけて撮影を行っていたという。また、ヒロイン役に淡島千景を起用したいと考えていたが松竹に所属していた彼女を出演させるのはなかなか大変だったらしく、同じく松竹で出演依頼していた当時の人気俳優佐田啓二の家に交渉をしに何度も足繁く通った。最終的に佐田が出演を許可し淡島も出演が決まり、五社協定の専属俳優が自社以外の制作会社の作品に携わったことは大きな影響を及ぼした。『花の生涯』は現在のように一月から十二月までの一年間の放送ではなく、1963年4月7日から12月29日の年内で終了した。1964年に入り、第二作『赤穂浪士』が放送開始する頃に読売新聞が「大河ドラマ」と名付け、その後この放送枠は視聴者にも大河ドラマという呼びが普及していった。第7作『天と地と』からはカラー放送が始まった。歴史上で取り上げられた人物上作品のほとんどは男性が主役になる事が多いが、朝ドラ『おしん』の脚本家、橋田壽賀子は1981年に第19作『おんな太閤記』で初の女性が主人公の作品を描き、大きな話題を呼んだ。また、戦国時代が多く描かれていたことをきっかけに『山河燃ゆ』(1984)『春の波涛』(1985)『いのち』(1986)と明治から昭和にかけての近現代史を扱った作品を放送するものの朝ドラが扱う時代と近かったことから評価を得るのは難しく、戦国路線が復帰した第25作の『独眼竜政宗』では歴代最高平均視聴率39.8%を記録し、大ヒットした。民放の時代劇も続々と放送終了し、現在テレビドラマで時代劇を扱うのは大河ドラマが中心となっている。

60年代ごろ、NHKでは作品を自局で制作していたが、民放では外部の制作会社がフィルムで撮影した「テレビ映画」を制作していた。この頃から『3人家族』(1968)のホームドラ

マや『ウルトラ Q』『ウルトラマン』(1966)などの特撮、『七人の刑事』(1961)などの刑事ドラマ、『若者たち』(1966)の青春ドラマなど様々なジャンルのドラマが放送された。渥美清が演じた“寅さん”で有名な『男はつらいよ』の原点とされる『泣いてたまるか』は脚本家や主演が毎話交代することで話題を集めた。70年代にかけて時代劇の人気シリーズ『水戸黄門』『鬼平犯科帳』(ともに1969)『遠山の金さん』『大岡越前』(ともに1970)『必殺仕掛人』『木枯し紋次郎』(ともに1972)『暴れん坊将軍』(1978)な続々と放送された。また、1971年には『仮面ライダー』、1975年には『秘密戦隊ゴレンジャー』が放送開始となり平成、令和と現在も続く人気作もこの時代から誕生した。その他、『熱中時代』(1978)『3年B組金八先生』(1979～)などの学園ドラマの名作や『太陽にほえろ!』(1972)『探偵物語』(1979)などの刑事・探偵ドラマ、『天下御免』(1971)『傷だらけの天使』(1974)『俺たちの旅』(1975)といった重厚感ある作品も放送された。70年代から80年代前半はホームドラマ全盛期と言われ、『ありがとう』(1970)や『時間ですよ』(1970)のほかに脚本家、向田邦子は『寺内貫太郎一家』(1974)『ムー』(1977)『ムー一族』(1978)『阿修羅のごとく』(1979)『あ・うん』(1980)と数々の名作を生み出した。また、『男たちの旅路』(1976)『岸辺のアルバム』(1977)『ふぞろいの林檎たち』(1983)の山田太一、『6羽のかもめ』(1974)『前略おふくろ様』(1975)『北の国から』(1981)の倉本聰とともに、「シナリオライター御三家」と呼ばれた。また、鎌田敏夫脚本の『金曜日の妻たちへ』(1983-1985)は不倫関係の男女の群像劇を描き、「金妻現象」と呼ばれる社会現象を起こした。

80年代後半からはトレンドドラマ、そして20代の働く女性をターゲットにしたフジテレビの月曜21時に放送される「月9」から名作が続出した。所謂バブル経済前後の1980年代後半から90年代前半に制作された、恋愛ドラマが主軸となっている作品である。当時のフジテレビプロデューサーだった大多亮氏の自著『ヒットマン テレビで夢を売る男』(角川書店)に基づき、テレビドラマ評論家である成馬零一氏によると、トレンドドラマについて大多は以下のように論じている。

大多はトレンドドラマを作る際、「ロケ地」「衣装」「音楽」についてこだわったと書いてある。まず、「ロケ地」に関しては、「とにかく話題になっている場所、若い人が集まってくる場所でロケをやろうと思った」と語り、渋谷の公園通り、湘南、代官山を例に挙げている。次に「衣装」に関しては、「スタイリストを導入した。リアリティーなんてなくてもいから、視聴者みんなが着たがるような衣装を着せようという考えだ」と書いてある。(中略)そして「音楽」に関しては、ドラマ制作者が久保田利伸すら知らないことを嘆き、「ミュージックシーンがこれほど進んでいるのだから、音楽から触発されたドラマや、歌詞からのイメージでストーリーが出来たってかまわないのではないだろうか」「せめて主題歌や劇中にかかる音楽は今の若い人が聞いたがっているものを使ったかったのだ」と語っている。(成馬2021:26)

トレンドドラマのきっかけの一つの作品として、若い男女の群像劇を描いたTBSの『男女7人夏物語』(1986)『男女7人秋物語』(1987)があげられる。この二作の成功に目をつけ、フジテレビは『抱きしめたい!』『君が嘘をついた』(ともに1988)を制作し、トレンドドラマを生み出していく。そして坂元裕二脚本の『東京ラブストーリー』、野島伸司脚本の『101回目のプロポーズ』(ともに1991)が大ヒットし、その後も『ひとつ屋根の下』『あすなろ白書』(ともに1993)『29歳のクリスマス』(1994)といった数々の作品を“月9”から輩出した。坂元裕二、野島伸司とともにこの頃から北川悦吏子や三谷幸喜といった若手の脚本家も次々と出始め、北川は『愛していると言ってくれ』(1995)や『ロングバケーション』(1996)を、三谷は『古畑任三郎』(1994ほか)『王様のレストラン』(1995)を世に出していった。その他『あぶない刑事』(1986)『踊る大捜査線』(1997)といった現在も多く視聴者に支持されている刑事ドラマや『渡る世間は鬼ばかり』(1990-2019)『ずっとあなたが好きだった』(1992)『家なき子』(1994)などの話題作も生まれた。

21世紀以降では、医療ドラマやリーガルドラマが人気ジャンルとなった。主な医療ドラマに『白い巨塔』(1978、2003)『ナースのお仕事』(1996ほか)『救命病棟24時』(1999ほか)『Dr.コトー診療所』(2003ほか)『コード・ブルー-ドクターヘリ緊急救命-』(2008ほか)『JIN-仁-』(2009、2011)『Doctor-X〜外科医・大門未知子〜』(2012ほか)がある。リーガルドラマでは『HERO』(2001、2014)『リーガルハイ』(2012、2013)『99.9-刑事専門弁護士-』(2016、2018)『イチケイのカラス』(2021)などがあり、医療ドラマ、リーガルドラマともにシリーズ化される事が多い。また、漫画などの原作が存在し、実写化された作品も21世紀以降の作品で急増し、『ごくせん』(2002ほか)『花より男子』(2005、2007)『ドラゴン桜』(2005、2021)『のだめカンタービレ』(2006)『逃げるは恥だが役に立つ』(2016、2021)をはじめ、ジャンル問わず起用されている。また、SNSが普及し始めた2010年代以降では視聴者が先の読めない展開に独自の視点で切り込んでいくいわゆる“考察ドラマ”が人気となっており、『あなたの番です』(2019)『テセウスの船』(2020)『真犯人フラグ』『最愛』(ともに2021)『VIVANT』(2023)では犯人捜しで考察する投稿が大きく見られた。

日本では現在、一週間に一話放送されるケースが主流となっている。連続テレビ小説は一週間に5話(2019年度後期までは6話)など、短い放送時間で二、三話に分けているドラマも存在しているが、基本は一話50分前後の全10話前後が多く、1990年代以降は季節ごとに三ヶ月の間放送している。1990年代以前は海外の作品などと同様2クールほど制作期間を設け、人気が出るとシリーズ化されていたが、俳優のスケジュール調整や2クールやった所で好評では無かった場合の事も考え、1クール制作し手応えがあった作品は続編として数年後再びドラマ化される場合や、劇場版として放映される場合が目立っている。プライムタイム(19時~23時)に放送される作品は視聴率の高さや予算も高く設定されるため、キャストの豪華さや脚本家、制作スタッフもこれまで名作を生み出してきたチームが担当する事が

多い。一方で2020年以降コロナ禍の影響を受け、テレビ以外の媒体での配信に特化した作品も出始め、勢いを見せている。

第2章 ネット普及前後のヒット作の違い

2-1-1. 脚本家の変遷

第1章ではテレビの歴史と日本のテレビドラマの歴史や特徴について触れた。ここからは、これまでの日本のテレビドラマのヒット作とネット普及後の現在のヒット作においてヒット作の定義が変化してきている事に触れていきたい。そこでまずは現在も活躍している脚本家を中心に、脚本家とヒット作をネット普及後の2010年を区切りとし、表1にまとめた。

表1 1990年代から現在まで活躍している脚本家の年代ごとのヒット作

脚本家	1990年代～2000年代のヒット作	2010年代以降のヒット作
野島伸司	『101回目のプロポーズ』(1991) 『愛という名のもとに』(1992) 『高校教師』(1993) 『ひとつ屋根の下』(1993) 『プライド』(2004)	『高嶺の花』(2018)
坂元裕二	『東京ラブストーリー』(1991) 『西遊記』(2006)	『Mother』(2010) 『いつかこの恋を思い出してきっと泣いてしまう』(2016) 『カルテット』(2017) 『大豆田とわ子と三人の元夫』(2021)
北川悦吏子	『素顔のままで』(1992) 『あすなろ白書』(1993) 『愛していると言ってくれ』(1995) 『ロングバケーション』(1996) 『ビューティフルライフ』(2000) 『オレンジデイズ』(2004)	『半分、青い。』(2018) 『夕暮れに、手をつなぐ』(2023)
大石静	『私の運命』(1994) 『ふたりっ子』(1996) 『オードリー』(2000)	『セカンドバージン』(2010) 『家売るオンナ』(2016) 『大恋愛～僕を忘れる君と』

	『功名が辻』(2006)	(2018) 『光る君へ』(2024)
三谷幸喜	『古畑任三郎』(1994 ほか) 『王様のレストラン』(1995) 『竜馬におまかせ!』(1996) 『新選組!』(2004)	『真田丸』(2016) 『鎌倉殿の13人』(2022)
岡田恵和	『南くんの恋人』(1994) 『若者のすべて』(1994) 『イグアナの娘』(1996) 『ビーチボーイズ』(1997) 『ちゅらさん』(2001 ほか)	『おひさま』(2011) 『最後から二番目の恋』(2012) 『ひよっこ』(2017) 『ファイトソング』(2022) 『日曜日の夜ぐらいは…』(2023)
中園ミホ	『Age,35 恋しくて』(1996) 『やまとなでしこ』(2000) 『スタアの恋』(2001) 『ハケンの品格』(2007)	『Doctor-X～外科医・大門未知子～』(2012 ほか) 『花子とアン』(2014) 『西郷どん』(2018) 『あんぱん』(2025)
大森寿美男	『泥棒家族』(2000) 『トトの世界～最後の野生児～』(2001) 『てるてる家族』(2003) 『風林火山』(2007)	『悪魔ちゃん』(2012) 『64(ロクヨン)』(2015) 『精霊の守り人』(2016-2018) 『フランケンシュタインの恋』(2017) 『なつぞら』(2019)
井上由美子	『GOOD LUCK!!』(2003) 『白い巨塔』(2003) 『マチベン』(2006) 『14才の母』(2006)	『緊急取調室』(2014 ほか) 『昼顔～平日午後3時の恋人たち』(2014) 『BG～身辺警護人～』(2018、2020)
大森美香	『カバチタレ!』(2001) 『ランチの女王』(2002) 『きみはペット』(2003) 『風のハルカ』(2005) 『ブザー・ビート～崖っぷちのヒーロー』(2009)	『あさが来た』(2015) 『青天を衝け』(2021)
遊川和彦	『GTO』(1998) 『オヤジい。』(2000) 『女王の教室』(2005)	『家政婦のミタ』(2011) 『過保護のカホコ』(2017) 『同期のサクラ』(2019)
宮藤官九郎	『池袋ウエストゲートパーク』	『あまちゃん』(2013)

	(2000) 『木更津キャッツアイ』(2002) 『タイガー&ドラゴン』(2005) 『流星の絆』(2008)	『ごめんね青春!』(2014) 『ゆとりですがなにか』(2016) 『いだてん〜東京オリンピック囁〜』(2019) 『俺の家の話』(2021) 『不適切にもほどがある!』(2024)
森下佳子	『世界の中心で、愛をさけぶ』(2004) 『白夜行』(2006) 『JIN-仁-』(2009、2011)	『とんび』(2013) 『ごちそうさん』(2013) 『天皇の料理番』(2015) 『おんな城主直虎』(2017) 『義母と娘のブルース』(2018) 『天国と地獄〜サイコな2人〜』(2021)
古沢良太	『相棒』(2005 ほか)	『リーガル・ハイ』(2012) 『デート〜恋とはどんなものかしら〜』(2015) 『コンフィデンスマン JP』(2018) 『どうする家康』(2023)
野木亜紀子		『ラッキーセブン』(2012) 『空飛ぶ広報室』(2013) 『重版出来!』(2016) 『逃げるは恥だが役に立つ』(2016) 『アンナチュラル』(2018) 『MIU404』(2020) 『海に眠るダイヤモンド』(2024)
吉田恵里香		『花のち晴れ〜花男 Next Season〜』(2018) 『30歳まで童貞だと魔法使いになれるらしい』(2020) 『恋せぬふたり』(2022) 『君の花になる』(2022) 『虎に翼』(2024)
生方美久		『silent』(2022) 『いちばんすきな花』(2023)

	『海のはじまり』(2024)
--	----------------

表1をみて感じたのは、①ネット普及前後でもヒット作を出している脚本家、②ネット普及以前ではヒット作を出していたものの、ネット普及後ではヒット作を生み出していない脚本家、③そしてネット普及後に脚本家デビュー、またはヒット作が多く独自のスタイルを確立している脚本家が存在していることだ。①は一番多く、坂元裕二、大石静、三谷幸喜、岡田恵和、中園ミホ、大森寿美男、井上由美子、大森美香、遊川和彦、宮藤官九郎、森下佳子、②には野島伸司と北川悦吏子、③には古沢良太、野木亜紀子、吉田恵里香、生方美久と区分した。ここで数人、分析する。

野島伸司と坂元裕二は同じような時期に脚本家デビューした二人である。1987年、フジテレビは若手新人脚本家を発掘すべくヤングシナリオ大賞を創設し、第1回は当時19歳の坂元裕二が『GIRL-LONG-SKIRT～嫌いになってもいいですか?』で大賞に輝き、翌年の第2回では野島伸司が『時には母のない子のように』で受賞した。1991年には坂元裕二が『東京ラブストーリー』を、野島伸司は『101回目のプロポーズ』を手掛け、両作とも月9、トレンドドラマを代表する作品となった。月9では初めての視聴率30%を超えた『東京ラブストーリー』はF1層(20歳から34歳までの女性)、なかでもOLから圧倒的な支持を得て、「月曜の夜は街からOLが消える」と言われていたほど社会現象となった。しかし、その後は野島が『愛という名のもとに』(1992)『ひとつ屋根の下』(1993)、また「野島3部作」ともいわれているTBS制作の『高校教師』(1993)『人間・失格～たとえばぼくが死んだら』(1994)『未成年』(1995)といった話題作を連発していったが、坂元は『二十歳の約束』(1992)『翼をください!』(1996)が思うようにふるわず、1996年にテレビドラマの脚本業を休止することとなった。1990年代における野島と坂元の明暗について、評論家の成馬零一氏は次のように分析している。

一番の理由は、ドラマでやっていこうという覚悟が当時の坂元には(野島ほどには)なかったということだが、何より当時のテレビドラマと坂元の書きたいものの相性が悪くなっていったことが大きいだろう。坂元が書こうとしていたのはストーリーよりも男女の会話の中に流れる微妙なニュアンスや雰囲気といった曖昧なもので、ストーリーよりも瞬間を切り取るスケッチに近いものだった。そのため『東京ラブストーリー』のような原作とキャラクターがしっかりあるものだとよくハマるのだが、オリジナル作品となるとキャラクターと物語が弱いという弱点が露呈してしまう。対して野島が描こうとしていたのは、キャッチーな台詞によってテーマが明瞭に語られる波乱万丈のストーリーだった。また、バブルが崩壊して以降、野島の偏愛する1970年代的な泥臭さが再び求められる時代となり、時代の闇をえぐるような暗い物語が求められる風潮に野島の資質が見事にハマったのに対し、1980年代の風俗にどっぷりと浸かっていた

坂元にとっては、自分の資質を活かしづらい時代となってしまったのだと言えるだろう。(成馬 2021:43)

1990年代では野島の方がヒット作を出していたのに対し、ネットが普及した2010年代以降では、坂元がヒット作を次々と出している。それは、成馬氏が述べていたような日常を切り取った会話劇と活動休止中の様々な経験から得た丁寧に設定されたテーマ性が上手くはまり、現在の社会派ドラマや細やかな心理描写が人気になりつつある近年の恋愛ドラマにもフィットし支持されているのかもしれない。一方で前述の「野島3部作」には近親相姦、レイプ、いじめ、立てこもりなどかなり攻めた内容となっており、現在のようなコンプライアンス(法令遵守)が求められる現代において難しい内容となっている。勿論、野島は3部作を執筆後も『プライド』といった王道恋愛ドラマなど手掛けたものの、社会派ドラマとなると現在好まれている社会派ドラマとは系統が異なり、ヒット作を生み出すのが難しくなっていたのではないだろうか。

同じことは北川悦吏子にも言えよう。北川悦吏子は『愛していると言ってくれ』(1995)『ロングバケーション』(1996)『ビューティフルライフ』(2000)『オレンジデイズ』(2004)といった恋愛ドラマで高視聴率を叩き出し、北川自身が手がけた作品はもれなくヒットすることから、「恋愛の神様」と称された。しかし、近年手がけた2018年度前期の連続テレビ小説『半分、青い。』以降の作品では苦戦を強いられている。『半分、青い。』は「朝ドラのヒットの法則」と言われている、「実在の人物をモデルにしたヒロイン」「戦争のシーンを入れる」「困難な時代でも夢に向かって明るく前向きに頑張る姿」といった要素を取っ払った「新しい朝ドラ」を展開した。ヒロインの鈴愛(永野芽郁)は幼少期に病気で左耳を失聴している設定だが、これは北川が2012年に自身の左耳が聞こえなくなった経験から基づいていたり、鈴愛の娘の名前やその他の登場人物も北川の関係者が由来となっていたり、作品の私物化が指摘された。また、鈴愛が歴代のヒロインたちから比べると一つのことに集中せず、中途半端に辞めてしまったり、自分の世界観を持った自由な性格がゆえに急に逆上したり強い口調で話す場面では視聴者から「自分勝手」や「朝から聞きたくない」といった声も多く、批判的な意見も多かった。北川はその後も2021年に『うちの娘は、彼氏が出来ない!!』、2023年に『夕暮れに、手をつなぐ』といった作品も手掛けたが、この2作に登場するヒロイン、空(浜辺美波が演じた『うちの娘は、彼氏が出来ない!!』の役名)と空豆(広瀬すずが演じた『夕暮れに、手をつなぐ』の役名)、そして鈴愛の三人に共通している点は、視聴者から共感を得る事が少し難しいキャラクター設定だと考える。例えば、鈴愛や空のセリフの言い回しが独特で少し浮いてみえてしまうことや周りを巻き込むドジっ子のように見える空豆のキャラクター設定は、陽気で少々デリカシーがない『ロングバケーション』の南(山口智子)とさほど変わらない。北川がヒット作を生み出した90年代のテレビドラマ作品のヒロイン像は南のようなキャラクターが受け入れられても、時代の変化に伴って求められるヒロイン像

も変化するため、時代に順応できなかつた結果が賛否を呼ぶ形となったのかもしれない。いずれにせよ、北川には筆者と同世代の20代のラブストーリーだけでなく、30代の大人のラブストーリーを書いてほしいと切に願っている。

2-1-2. 2020年代活躍する脚本家の特徴

現在のテレビドラマの評価には視聴率以上にSNSの評価、とりわけX(旧:Twitter)での視聴者の投稿の印象で作品の評価が判断されているように見受けられる。表1からも見て分かるように、坂本裕二や大石静、三谷幸喜のようなベテラン勢から遊川和彦や宮藤官九郎のような固定概念を砕くような新しいストーリー構成やキャラクター設定をする者、そして近年漫画原作のテレビドラマが増えている中でオリジナリティを出しながらも原作ファンからも称賛される作品展開をする森下佳子や野木亜紀子、『虎に翼』の吉田恵里香、『silent』をきっかけに若い世代を中心に支持を集める生方美久など30代の脚本家まで幅広い。

脚本家それぞれで作風が違うのは前提として、現在活躍する脚本家に共通している事は作品に対し視聴者が共感できるかどうかだと考える。90年代頃までの作品はトレンドドラマの雰囲気を感じさせる作品も根強く、視聴者に憧れの生活やファッションを抱かせ、「お仕事ドラマ」に関して言えば、主人公と同じ職業になりたいと思う子どもも少なくなかった。実際、木村拓哉がこれまで演じてきたピアニストや検事、美容師、パイロットやアイスホッケー選手はドラマ放送の翌年志願者が増え、女性が主なターゲット層のテレビドラマでは異色ともいえる、同性からも支持されるほど「憧れ」の思考が強い作品がヒット作となっていた。しかし、2024年現在のテレビドラマの多くは、「視聴者と同じ感覚の役が出てくるかどうか」が評価される。前までは「理不尽なことにも耐え一生懸命に働き、成長していく」のが素晴らしいと言われていた時代が、「理不尽なことがあり、嫌な思いをしてまで仕事に行く必要はない」と、これまで人々が少なからず思いつつもテレビドラマではタブーだとされてきた「ダメな部分」を出すようになっていった。憧れよりも共感を求める傾向になったのは「失われた30年」ともいわれる長年の不況により寄り添ってくれる作品への需要の高まりとスポンサーの問題により制作費削減によって人々が憧れるような良い暮らし(=お金持ち)を描けなくなったからではないかと推測する。

2-2. 視聴率重視から配信再生回数重視へ

上記で取り上げた脚本家以外にもヒット作を生み出した脚本家が数多く存在するとともに、最近では脚本家だけでなく『○○』制作チームが送る新ドラマ」といった制作チームでの宣伝を見かけることも多くなった。脚本家それぞれが持つ個性が80年代90年代を彩った脚本家に比べて目立たなくなってきたという指摘もある。しかしながら現在、小説や漫画が原作のテレビドラマ作品も多いなか、個性が強い脚本家によって作品が脚色されすぎてしまい原作ファンや原作者から非難されるのを防ぐという点もあるだろう。

また、数年前からテレビドラマのヒット作の定義が曖昧になってきている。第1章でも述べた通り、テレビは草創期において不特定多数が一カ所に集まり楽しんでいた時代から1960年代から1970年代ごろにかけて家族が一カ所に集まって楽しむ時代へ変化した。1980年以降になると視聴者のターゲット層に区切った番組が始まり、1990年代から2000年代にかけてインターネットが普及し始め、2010年代にはスマートフォンの登場、普及があった。SNSにおいては2008年にTwitterの日本語版サービスが始まったが、スマホが普及するまではPCを持っている人を中心に利用していた。一方、スマホはPCのような一家に1、2台置いてあるのとは違い、一人一台所有している事が多く、スマホをきっかけにSNS利用者が伸びていった。昨今のテレビドラマ放送時にはX(旧:Twitter)で放送時間に合わせてリアルタイムで実況や感想を投稿するやり方が主流になりつつある。話題になった作品はその時間帯のトレンド1位になるなどの盛り上がりを見せ、#(ハッシュタグ)をつけられた作品の感想が次々と投稿されてゆく。スマートフォンの普及に伴い、ますますテレビの視聴率はテレビドラマ関係なく減少しているが、それに伴い、それまでヒット作の定義の軸とされてきた「視聴率の高さ」が揺らぎ始めている。ここで、表2に21世紀以降のテレビドラマにおいて平均視聴率が高かった作品を1位から10位までまとめた。また、平均視聴率とは別に特に盛り上がりを見せた、作品内の最高視聴率も添えておく。

表2 21世紀のテレビドラマにおける平均視聴率TOP10

順位	作品名	平均視聴率	最高視聴率
1位	HERO(2001)	34.3	36.8
2位	GOOD LUCK!!(2003)	30.4	37.6
3位	半沢直樹(2013)	29.1	42.2
4位	ごくせん第2シリーズ(2005)	27.8	32.5
5位	白い巨塔 第2部(2004)	26.2	32.1
6位	プライド(2004)	25.2	28.8
7位	家政婦のミタ(2011)	24.8	40.0
8位	半沢直樹(2020)	24.8	32.7
9位	篤姫(2008)	24.5	29.2
10位	華麗なる一族(2007)	24.3	30.4

この結果から見て取れるように、ここ数年でランクインした作品はTBSの日曜劇場『半沢直樹』(2020)のみとなっており、2020年以降平均視聴率の記録が更新された作品は入ってきていない。筆者が比較対象と設定した、スマホが普及しSNSの利用が活発化した2010年以降の作品に絞ってみても『半沢直樹』シリーズと『家政婦のミタ』(2011)の3作で、いかに高視聴率を取りづらくなっているかがわかる。色で塗りつぶした4作の主演は全て木村

拓哉が務めており、当時彼が主演した作品の人気ぶりが明かされることとなった。

ではなぜ、視聴率が以前よりも取れなくなってしまったのか。何度も明記しているように、テレビが情報媒体の中心だった時代からインターネットの普及、そしてスマホでテレビが無くとも気軽に観られるという点も影響している。しかし、視聴率が獲得しづらくなったのには以下の原因があげられる。

① アニメ、ゲームなどの家で楽しめるコンテンツの多様化

② TVer やサブスクリプションの配信限定ドラマの登場

1 つ目はわざわざテレビをつけなくともアニメやゲームといった家で楽しめるコンテンツが充実し、選択肢が増えたことがあげられる。それまでアニメ好きなコミュニティだけで盛り上がっていたのに対し、近年アニメブームが再来し、以前に比べラフに観られるコンテンツ化になろうとしている。実際、映画では『劇場版 鬼滅の刃 無限列車編』がコロナ禍の2020年に公開されるとそれまでの日本映画歴代興行収入1位を死守してきた『千と千尋の神隠し』(2001)の記録を抜き、404.3億円という記録を打ち立てた。その他『呪術廻戦』『SPY×FAMILY』、『チェンソーマン』や『推しの子』など作品の主題歌がその年のヒット曲と言われるほど数年前の限定されたコミュニティから開かれたコミュニティへと変化している。このような傾向はアニメやゲームに限らず、「推し活」ブームとして好きなアイドルやキャラクターなどにお金や時間を費やし、応援する(=推す)趣味が多様化し、テレビを主体に考えなくなっていったと考察する。

2つ目の要因として、「TVer」の登場や「Amazon Prime Video」「Netflix」などのサブスクリプションから配信されたドラマが人気を博しているからと考える。「TVer」とは、2015年10月から始まった在京キー局5社(日本テレビ、テレビ朝日、TBS、フジテレビ、テレビ東京)主導による無料見逃し配信サービスのことである。アプリやサイトを利用するとスマホやPC、タブレット端末から手軽に作品を無料で視聴できる。TVerはテレビドラマだけでなく、バラエティ番組やアニメ、報道といった地上波番組を中心に地方局の作品も配信され、見逃し配信のほかにもゴールデン・プライムタイムでは在京キー局5社のリアルタイム配信も行っており、かなり充実している。基本的には次の話が放送される1週間を目途に配信は終了してしまうものの、過去の名作を次クールの1~2ヶ月の間に配信することもある。TVerのユーザー数は図1から見て分かるように2015年にサービスを開始して以来右肩上がりが増えており、2024年7月時点で4000万人を突破する程の勢いとなっている。TVerは好きな時間に作品を視聴できるため共働き世帯が増えた現在、様々な生活スタイルに対応でき支持されている。また、TVerとは別に「Amazon Prime Video」「Netflix」といった有料配信サービスもコロナ禍の巣ごもり需要に火が付き、韓国ドラマの『愛の不時着』は2020年2月にNetflixで日本でも配信がスタートし、世界的な大ヒットとなった。2024年には日本制作の『地面師たち』や『極悪女王』も話題となり、SNSを中心に反響が寄せられている。

TVerのユーザー数が4000万人突破したことに伴い、近年のテレビドラマ評価はTVerの

再生回数やお気に入り登録者数をヒット作の判断基準の一つに置いている。例えば、若い世代を中心に支持された 2022 年のフジテレビで放送された話題作『silent』では 238.3 万人(2024 年 12 月現在)の登録者数や第 1 話放送後 1 週間の再生回数が 443 万回(TVer のみ)再生され、当時の民放歴代最高記録を樹立した。『silent』と同じ脚本家による『海のはじまり』(2024)ではその記録を更新し、初回で 465 万回再生を突破し新たな記録をつくった。『silent』は TVer の再生回数とお気に入り登録者数での記録や Twitter では放送直後トレンド 1 位になるほどの実況コメント数を獲得し、話題となった作品だった。一方で、視聴率の観点からすると、平均視聴率は 7.6%、最高視聴率は最終話の 9.3%という結果だ。視聴率は「10%を超えると合格」と言われるほど昔と比べてかなり下がってしまったが、『silent』は 10%にも届いていない。しかし、2022 年のテレビドラマでのヒット作と言われれば『silent』と思いき浮かべる人も多いことだろう。このように近年のドラマでは、『半沢直樹』のように高視聴率と話題性をもってヒット作と呼ばれている作品と『silent』のような視聴率はさほど高くないものの、TVer の再生回数や X(旧 : Twitter)の実況による盛り上がりでヒット作に値すると判断された作品の二通りのヒット作の定義となっている。

図 1 TVer のユーザー数の状況(引用 : TVer 公式サイト)



第 3 章 宮藤官九郎と野木亜紀子の作品はなぜ支持されるのか

3-1. 宮藤官九郎が評価される理由

この章では第 2 章で紹介した脚本家のなかでも、現在のテレビドラマ界でとりわけ支持され、各々の作風を築き上げている二人の脚本家について書いていきたい。その二人とは、宮藤官九郎と野木亜紀子である。二人が脚本を担当した作品はなぜ話題となり、賞をもらう

ほど評価されるのか。独自の視点で宮藤と野木が評価される理由を探る。

宮藤官九郎は1970年生まれの宮城県出身の脚本家である。脚本家としてだけでなく俳優、映画監督、演出家、ラジオパーソナリティ、作詞作曲家と多岐にわたり活動し「グループ魂」とミュージシャンとしても活動している。1990年に演出助手として松尾スズキ主宰の劇団「大人計画」に所属し、これまで数々の作品を手掛けてきた。「大人計画」には阿部サダヲや平岩紙、星野源(マネジメント契約のみ)や荒川良々や皆川猿時といった宮藤の作品に多数出演する役者も所属している劇団となっている。舞台の脚本や演出を手掛けるなか、同名小説が原作の『池袋ウエストゲートパーク』(2000)で高視聴率を記録し、その後も『木更津キャッツアイ』(2002)『タイガー&ドラゴン』(2005)『あまちゃん』(2013)『ゆとりですがなにか』(2016)『不適切にもほどがある!』(2024)といった数々の話題作を手掛け、2000年代以降を代表する脚本家の一人として評価されている。

宮藤が描く作品の特徴は主に3つあると筆者は考える。この3つの特徴を宮藤の代表作で2013年にNHKの連続テレビ小説で放送された『あまちゃん』を例にあげ、考察する。

1つは、「小ネタ」を上手く利用し、重たいテーマでもコメディ要素に変えている点である。宮藤の作品にはいつも何かしらの社会的なメッセージが隠されている。『あまちゃん』では地方の過疎化、インターネットを通して話題となるアイドルの出現、東日本大震災からの復興などがあげられる。宮藤はこのメッセージを「小ネタ」を利用し上手く消化させ、コメディ要素に変えている。宮藤が作り出す「小ネタ」とは、実在の物や人をフィクションの世界である作品内のセリフに追加したり、実際に本人が登場したりする仕掛けのことで知っている人がクスッと笑える部分を指す。次に書く野木亜紀子やその他の脚本家もちろん使ってはいるが、宮藤ほど多用しているのは見たことが無い。『あまちゃん』は東日本大震災が起きた2011年から約2年後の2013年に放送された、岩手県久慈市を舞台にした作品で、母、春子の里帰りについてきたヒロインのアキがその土地の人々と触れあい、次第に自分の居場所を見つけていく物語だ。『あまちゃん』を描くうえでどうしても東日本大震災の話題は出てくるため、宮藤が震災をどのように描くのか注目が集まった。

2011年の夏、NHKから朝ドラの脚本担当のオファーをされた宮藤はそれまで自分の出身である東北を舞台にした作品を手掛けていなかったことから、東北が舞台の朝ドラをやろうと決めたという。以下の引用は、宮藤が『あまちゃん』を書き終えた後のインタビュー記事での内容である。

僕は宮城県出身なので、東北の引き出しが多いこともあって、「物語に合いそうな場所をまず東北で探してください」と番組スタッフにお願いしたんです。震災があったから舞台に選んだとかそういうことではなく、僕が書きたいことを表現する場所として東北が最適だった、ということです。物語では、震災のことも描かれますが、それも含めて〈あまちゃん〉全26週のメッセージ。僕としては、全国の皆さんに楽しんでもらえ

て、元気になってもらえるような作品を作りたいというのが、発想の原点です。(宮藤 2013:110)

宮藤はこのように述べているが、筆者はこの作品は「東北を元気づけたい」という宮藤の思いが込められた作品だと強く感じる。通常、朝ドラにはヒロインを通して長い年月を描く作品が多く、どうしても登場人物が誰かしら亡くなってしまう。しかし、『あまちゃん』は2008年夏から震災後の2012年夏までの4年間という短い期間ということもあり、誰も亡くならない。当時視聴者だった筆者も岩手で暮らすアキの祖母である夏が震災で命を落とすのではないかと心配だったが、今思うと誰も死なないという選択をしたのも震災が少なからず影響しているだろう。宮藤は東日本大震災をたった一日しか描かなかったことや、実際の被害の映像は使用せずあくまでジオラマで被害の深刻さを表現することに留め、視聴者に「想像力」を掻き立てたとともに、「散々傷ついたので繰り返して被害の様子を見せることはない」と語っているように思う。震災をじっくりと描き過ぎず、反対に地元の人々の他愛もない会話をセリフに落とし込み、作品全体が重い雰囲気とならずに済んだ。宮藤があくまで伝えたかったのは「地元っていいな」「東北の人に少しでも元気を」であり、決して「被害が深刻だから行きづらい」といったマイナスな思考ではないだろう。放送後、聖地巡礼のために舞台となった久慈市が大きく盛り上がったように、『あまちゃん』は東日本大震災を忘れないための役割を担ったとともに、東北の復興をプラスの方向で呼びよせた形となった。

2つ目に、登場人物が一人一人際立っている点である。『あまちゃん』には実に豪華な俳優陣が集結し、なかでも舞台となった岩手の久慈市をモデルとした架空の市、“北三陸市”編に登場する俳優陣はベテラン勢が多く出演しており、一人一人これでもかというほどキャラが濃い。一方、ヒロインのアキは従来の朝ドラのヒロインのイメージを覆すほど、明るくもなければ存在感も無い。『NHK 連続テレビ小説「あまちゃん」完全シナリオ集 第1部』に収録されている第1話には前半アキのセリフはほぼ無く、かわりに母、春子と春子の幼馴染の大吉がひたすら話しているという構図となっている。これはヒロインの能年玲奈(現：のん)が新人俳優だからこそ、他作品に比べてベテラン勢がヒロインを支える体制が強かったのかもしれない。もともと朝ドラには大河ドラマ同様に出演者の人数が多いことで有名だが、人数が多いことでキャラクター設定が曖昧になってしまい、視聴者の印象に残らないことも少なくない。しかし、『あまちゃん』ではキャラクター設定が明確でキャラ被りが無く、再登場した際でも思い出しやすいほど一人一人の登場人物の個性が出ていた。なかでも作中たった1話のみの出演ながら当時Twitterを中心に大きな注目を集めたのが、勝地涼が演じた「前髪クネ男」ことTOSHIYAだろう。勝地が演じたのは、アキが出演する映画『潮騒のメモリー』内でアキの恋人役を演じることになった人気ダンスグループのパフォーマー、TOSHIYAである。ビジュアルはいわゆる平成の頃、男性内で流行した茶髪にロン毛、

ローライズジーンズなどの“ギャル男”に部類される。TOSHIYA に対し、アキが「前髪クネ男」と命名した場面を『NHK 連続テレビ小説「あまちゃん」完全シナリオ集第 2 部』から引用し、紹介したい。

トシヤ役の TOSHIYA が入って来る。

(中略)

アキ N「TOSHIYA さんは ZOO STREET BOYS というダンスチームのメンバーで、若者の間では、すごい人気で」

TOSHIYA「映画とか見ないし、演技とか興味ないけど、1 日だけスケジュール空いたんでえ、出ることにしたっす」

アキ N「前髪が個性的で、腰さ鎖じゃらじゃらブラ下げで、ムキムキで」

小刻みにリズムを取りながら、前髪を気にする。

TOSHIYA「演技もダンスも同じ表現だからね」

アキ N「すいません、言っちゃいますけど、苦手なタイプです！なんかクネクネしてて、いけ好かないダンス野郎です！」

TOSHIYA「うわ、ちょーやべえじゃん、このセット！撮ってえ！」

廃屋と小舟のセットが組んである。マネージャーにスマホを手渡し、写真撮りながら、アキ N「『前髪クネ男』と呼ぶごどにしました」(宮藤 2013:470)

このシナリオでは描かれていなかった、TOSHIYA が腰を振りながらアキに迫ってくる場面は同作で共演した古田新太が勝地に対し「もっと腰を振った方が良い」と演技指導をし、唯一無二のキャラクターが誕生した。登場回数はたった 1 回だったが、勝地によるとかなりの反響があったといい、今では作品のファンからも「伝説回」と呼ばれているほど「前髪クネ男」は話題になり、目が離せないキャラクターとなった。

3 つ目は、大人数がひとつの場所で会話劇をする場面が多い点である。『あまちゃん』の中では、北三陸編での喫茶兼スナックの「リアス/梨明日」がメインキャストのたまり場として登場する。通常のドラマならば、たまり場には他の客がいるなかでヒロインとその周りがフォーカスされる形の映し方だが、『あまちゃん』ではカウンター席(筆者が数えた結果、おそらく 7 席)に全てメインキャストが座るという光景が多々あり、まるで舞台を見ているような感覚にさせられる。この表現は、宮藤が「大人計画」で演出を担当していた経験から得た発想ともいえるだろう。中でも、少人数の劇団ならではの演出だと感じたのは、エキストラを省いて、全てメインキャストで固めたことである。多くみられる、エキストラたちが映りこんでいる店内で会話をするメインキャスト 2 人の映し方は、いわゆる大人数の劇団のアンサンブルを用いた演出に近いものを感じる。ある空間にメインキャスト達を大人数

集めて会話劇を繰り広げるのは大所帯ではない「大人計画」の劇団出身らしさがあった。

『あまちゃん』を例に少し熱く語ってしまったが、このように宮藤の作品は3つの特徴があり、この作風は現在のテレビドラマでも好評である。『あまちゃん』が放送された2013年はSNSの普及が急速に進んでいた時代であり、同年TBSで放送されていた『半沢直樹』の「倍返し」や『あまちゃん』の「じえじえじえ」はユーキャン新語流行語大賞を受賞した。ファンアートと呼ばれる好きな作品や人物のイラストをSNSに投稿する流れがあるが、『あまちゃん』では「あま絵」として多数投稿されたことや、「前髪クネ男」をはじめ作品内で登場したワードがトレンド入りするなどテレビドラマとSNSの融合は『あまちゃん』や『半沢直樹』の頃から盛んになったように感じる。

宮藤はこれまで数々の作品で脚本賞を受賞している。なかでもザテレビジョンドラマアカデミー賞では14作で脚本賞を受賞し、専門家からも高く評価されている。しかし、評論家からの評価が高いとは裏腹に、日曜劇場や大河ドラマで歴代最低視聴率を記録するなど評価が上手く反映されていないという懸念点がある。大河ドラマ『いだてん』に関して言えば、主人公を2人置いたことや、時代が途中で行き来する展開(主人公の時代と、1964年の時代)が従来大河ドラマの視聴者層にとって宮藤の作風が難しかったという結果だろう。逆に捉えれば、現在のドラマ制作陣が狙うコア層(13歳から49歳)とは相性抜群なため、これからさらに明るく、そして笑える社会派コメディ作品を沢山生み出してほしい。

3-2. 野木亜紀子が評価される理由

野木亜紀子は、1974年生まれの東京都出身の脚本家である。2010年、『さよならロビンソンクルーソー』で第22回フジテレビヤングシナリオ大賞を受賞し、脚本家デビューを果たす。『ラッキーセブン』(2012)のほか、小説や漫画が原作の『空飛ぶ広報室』(2013)『重版出来!』『逃げるは恥だが役に立つ』(ともに2016)を多く手掛け、原作を主としながらも映像作品としての見せ所を考えたドラマオリジナル脚本は原作ファンからも定評がある。『逃げるは恥だが役に立つ』はエンディングに星野源の『恋』に合わせて出演者が踊る「恋ダンス」をはじめ、社会現象を巻き起こした。その後、野木亜紀子はオリジナル作品も手掛けるようになり、なかでも脚本を野木、監督を塚原あゆ子、新井順子プロデューサーがタッグを組んだTBSの金曜ドラマで放送された法医学者の視点で事件の背景を描いた『アンナチュラル』(2018)と警察の架空の機動捜査隊“第4機操”の活躍を描いた『MIU404』(2020)は作品のファンが多く、令和を代表する脚本家の1人として「野木ブランド」を築き上げている。

野木が描く作品の特徴を2つ考えた。まず1つ目は、徹底した取材力と社会問題とのすり合わせだ。野木は日本映画学校を卒業後、ドキュメンタリー制作会社で取材をする仕事をした経験から、原作モノを扱う上ではまず作品が何を伝えたいのかという軸を理解し、映像化する上で必要となる要素を足していく。オリジナル作品であっても昨今の社会問題を徹底的に調べる。『アンナチュラル』には感染症、デマの拡散、自殺志願者、いじめ問題『MIU404』

には少年犯罪や外国人労働者問題、闇取引など昨今取り沙汰されている社会問題をエンターテインメント化しながら物語に落とし込む。とりわけ話題になったのは、『アンナチュラル』の1話「名前のない毒」である。この回は急死した男性の死因を特定していくなかで男性が MERS コロナウイルスに感染していたことが発覚し、「PCR 検査」というコロナ禍を経て皆が知るようになった用語が出てくる。また、国内感染が確認されたことによって、報道番組の感染者を責め立てる描写や SNS を中心とした感染者への誹謗中傷やデマなどをコロナが流行する前の 2018 年で描かれ、「予言したような話」とコロナ禍で再注目された。現代社会が抱える問題とフィクションの融合は前述の宮藤にも書いたが、2 人の手法は似ているようで少し違う。宮藤は社会問題を扱いながらも、作品全体が重い雰囲気にならぬよう「小ネタ」を活用し明るいテイストの社会派コメディを描くのに対し、野木の場合は社会問題を全面押し出し、なぜその問題が起きてしまったのか、そして関わりがないと高を括る我々視聴者たちにもこの問題が最悪に転じた場合どうするのかと問い、苦みを与える。

2 つ目は、女性の登場人物の自然な描写だ。『アンナチュラル』や『MIU404』を観てとてもよく感じるのは、女性の登場人物たちが男性に好かれるような女性像ではなく、同性に好かれ格好良いとされる描き方がされていることだ。『アンナチュラル』に出てくる女性キャラの主人公、三澄ミコト(石原さとみ)と東海林夕子(市川実日子)は性格がサバサバしており、いつもくだらないことを言い合っては笑っている。また、いつもは白衣の下にはラフな洋服が多いミコトが、婚約者の家族と会食をする日にワンピースを着ていると職場の男性陣が口々に何か予定があるのかと言うと「私の服はどうでもいいから！」と意見する。女性が日常生活を送る中で少しモヤッとした疑問点を登場人物たちが代弁してくれるのは嬉しく、影響力があるテレビドラマで触れてくれるのはとても清々しい。

そして、これまでの役柄で小悪魔系女子を演じることが多かった石原さとみがミコトのようなどこにでもいそうな働く女性を演じたことにもギャップがあった。本来の石原さとみの性格はバラエティ番組やインタビューなどを観た際にミコト同様サバサバした印象だったこともあり、自分の意見をしっかりと持っている姿がミコトと似ているように感じる。俳優本来の飾らない美しさを引き出した脚本は見事だと言える。

社会問題を上手く作品内に落とし、登場人物を現実味あふれる自然な演技に変える力があるからこそ、野木亜紀子の作品には多くのファンがおり、ブランドを築き上げたのだろう。

第 4 章 SNS の影響力と制作の変化

4-1. 現代人に合わせた映像構成

4-1-1. タイパによる視聴方法の変化

現在、テレビドラマや映画でたびたび問題視されているのが、タイムパフォーマンス、通称“タイパ”である。タイパとは、時間を効率よく使うことを軸とし、その背景にあるのは

情報社会における供給過多によるものだ。情報社会、とりわけスマホが普及してからスマホで様々なものを調べられ、楽しむことが可能となった。タイパをよく表しているのが TikTok という SNS だ。中国で作られたショート動画アプリは 2017 年に日本でサービスがはじまり、2018 年には 10 代、20 代の若い世代を中心に流行した。TikTok の投稿には、有名曲をアレンジして歌ったり踊ったり、チャレンジ動画を作ったりと種類は沢山あるが、TikTok で流れている曲がイントロかサビのことが多く、曲名を聞いてサビは歌えるものの、フルで歌唱できないという若者も増えている。できるだけ時間を無駄にせず、有効活用したいという一方で、知っておきたいコンテンツ、なかでも視聴時間が長い映画やテレビドラマ作品に関して、違法アップロードとしてあらすじを起承転結にまとめた「ファスト映画」が社会問題化している。制作陣はどの場面にも一つの作品として重要だと思いながら撮っているのだが、タイパを重視している立場からすれば、どこが面白いのか、また時間を割いてまで観る価値のある作品なのかというロコミをチェックする感覚なのだろう。

テレビドラマにおいては、倍速視聴や別の作業をしながらの視聴が多いとされる。2022 年に話題になった『silent』は中途失聴者となったかつての恋人との再会、恋愛が描かれ、音声での会話以外に手話や LINE といったコミュニケーションツールも登場し、細やかなセリフの言い回しや感情描写は「ながら見」や倍速では理解することは難しく、結果的にじっくりと鑑賞してもらうことに繋がった。

4-1-2. OP 映像、ED 映像のカット

再放送でひと昔前の作品を鑑賞していて感じたのが、オープニング映像とエンディング映像の変化である。例えば、トレンドドラマの代表作『東京ラブストーリー』では作品とともに小田和正が歌う主題歌『ラブストーリーは突然に』(1991)が 200 万枚を超えるほどの大ヒットとなった。この大ヒットには作品の演出が大きく影響している。まず、タイトルクレジットとともに OP を流し、作品後半のクライマックスの絶妙なタイミングでもう一度流すという手法である。つまり、1 話に付き最低 2 回流れることによって耳に残り CD を買う行動に繋がり、作品は高視聴率、CD の売り上げも上がるタイアップを仕掛け、見事にどちらも大ヒットに繋がった。

しかし現在、タイトルとともに流れる OP はせいぜい 20 秒程度で、曲の一番をフルで流した作品は最近では見かけない。そこで、過去の作品から最新作まで、20 作の OP や ED がどれほど流されているのか確認した。ちなみに ED については、ドラマ終盤で流れてもカウントせず、あくまで ED 用の映像があるかどうかで考える。

表 3 21 世紀以降に制作された作品の OP と ED の有無と流さ

作品名	OP 映像の有無	時間	ED 映像の有無	時間
HERO(2001)	○	45 秒	○	1 分 55 秒
GOOD LUCK!!	○	33 秒	○	1 分 45 秒

(2003)				
プライド(2004)	○	2分13秒	×	
花より男子(2005)	○	1分50秒	×	
のだめカンタービレ (2006)	○	10秒	○	1分21秒
コード・ブルー-ドクター ヘリ緊急救命- (2008)	○	20秒	○	1分54秒
JIN-仁-(2009)	○	27秒	○	1分58秒
マルモのおきて (2011)	○	34秒	○	1分38秒
家政婦のミタ(2011)	○	11秒	×	
半沢直樹(2013)	○	30秒	×	
信長協奏曲(2014)	○	23秒	×	
天皇の料理番(2015)	○	26秒	×	
逃げるは恥だが役に立 つ(2016)	○	25秒	○	1分33秒
初めて恋をした日に読 む話(2019)	○	16秒	×	
恋はつづくよどこまで も(2020)	○	31秒	×	
MIU404(2020)	○	6秒	×	
天国と地獄～サイコな 2人～(2021)	○	30秒	×	
オールドルーキー (2022)	○	24秒		
silent(2022)	×(クレジット のみ)		×	
西園寺さんは家事をし ない(2024)	×(クレジット のみ)		×	

表3をみると、『プライド』(2004)『花より男子』(2005)ではOP映像に主題歌を入れ、作品の終盤でもう一度流す構成となっている。それ以外の作品でのOP映像は30秒以内にまとめた短いものとなっている。一方、ED映像は2000年代の作品には比較的多くの作品で作られていたが、次第に物語のクライマックスシーンでタイミングよくかける演出が主流となったのか、2016年の『逃げるは恥だが役に立つ』以降の作品ではあまり見かけなくな

った。また、『silent』(2022)や『西園寺さんは家事をしない』(2024)のように、OP映像を差し込むのではなく、物語の延長で壁や机、雑貨用品、空にクレジットのみ表記する作品も多くなり、さらなる短縮が出始めている。ED映像が昔のドラマに比べて少ないのは、映画のエンドロールを観ない人がいるように、テレビドラマのED映像も観ずに消す人がいるからだろう。ED映像のために1、2分使うのではなく、その時間を本編に入れたい制作側の意向もあるのだろうか。

4-2：公式アカウントの活用

インターネットの普及に伴いテレビドラマ界で多くなったのは、SNS公式アカウントである。ドラマ公式アカウントとは、作品専用開設されたSNSのアカウントである。主にX(旧：Twitter)、Instagram、TikTok、LINEでは作品専用で、YouTubeでは制作局のアカウントにドラマ関連の投稿が並ぶ。アカウントの投稿内容は次週の宣伝、撮影のオフショットや撮影風景を投稿し、宣伝以外の内容も流しているのが特徴だ。

公式アカウントによって「作品内の登場人物」として映る俳優以外の姿、つまり「役が入っていない、素に近い俳優」の姿を観ることがメイキング映像やオフショットで視聴者に提供されるようになった。2024年10月に始まったTBSの金曜ドラマ『ライオンの隠れ家』のSNSアカウントを例にすると分かりやすいかもしれない。この作品は、柳楽優弥演じる市役所勤めで平凡な優しい青年、小森洸人と坂東龍汰演じる自閉スペクトラム症の弟、美路人との兄弟での暮らしやある時突然家を訪ねてきたライオンと名乗る少年との出会いを通して描かれる家族愛を描いたヒューマンサスペンスドラマだ。この作品内では自閉スペクトラム症の役を見事に演じている坂東だが、公式アカウントのメイキング映像ではライオン役の子役、佐藤大空と仲良く遊んでいる様子が度々アップされている。また、ライオンの父で家族にDVを行っていた橘祥吾役の向井理も作品内では家族との団らんはあまり描かれず、冷酷な表情が話題となっていたが、こちらSNSでは佐藤を抱っこしていたりアスレチック施設で触れ合っている様子が投稿され、役柄とのギャップに驚かされた視聴者のコメントも寄せられている。

このように、素の俳優の様子を知ることができるとともに、役のイメージのまま俳優自身のイメージを定着させないようにする役割も担っているのではないかと考える。それは、俳優の活躍の場が関係している。俳優の活躍する場の多くは、何かしらの役柄が入った状態である。テレビドラマでは作品の登場人物に、CMでは商品を宣伝するイメージキャラクターとして出演している。もちろん、バラエティ番組やトーク番組に出演する俳優は昭和の頃に比べると格段に増え、俳優個人のSNSアカウントを所有していれば新たな俳優自身の魅力を発見できることもある。しかしながら個人のSNSを持っていない俳優、中でもこれまであまり活躍していなかった俳優が悪役として評価されそのイメージが一般の視聴者から定着されてしまうと一種の営業妨害ともなりかねない。昨今SNSを中心にデマや拡散も多く、一度疑いが出てしまうと疑いをはらすのもなかなか難しい。週刊誌のスcoopには事実と

デマが入り混じっていることも多く、SNS 上で疑いもせず信じてしまった人たちが拡散をし、活動に影響を及ぼすことも多い。このような事態を未然に防ぐためにも、メイキング映像を TV 番組の特番でしか流さないスタンスでいるのではなく、良いも悪いも拡散されやすい SNS を使い流すことで役以外の俳優たちの姿を視聴者にみせ、誤解を与えないようにしている側面も存在しているのではないかと考察した。

4-3：視聴者の意見に左右される制作陣

「テレビ離れ」が加速し、時代はインターネットと叫ばれているが、X のトレンドをみると、テレビ番組のタイトルや番組内でのワードがランキング上位にいることも多く、情報媒体の多様化はしつつも、いまだにテレビの内容は話題を集めているように感じている。第 2 章でも触れたが、現在のテレビと SNS（おもに X）の関係はリアルタイムでの実況がメインになっており、テレビドラマだけでなく、その他の番組も同様だ。作品のタイトルに#(ハッシュタグ)をつけ、リアルタイムで視聴者たちが感想を投稿する姿はまさしく実況であり、SNS が普及する以前よりも視聴者の声はテレビ局に直接行くのではなく、内容を全世界で把握できるようになった。SNS が広がる以前は、番組や作品に対しての意見は制作側に電話や FAX で直接届き、意見の詳しい内容は送信者と受信者のみ確認できていた。しかし、SNS では制作者に直接ではなく、間接的に届く。「フォロワーも少ないし、日々の不平不満をつぶやいたところで誰もみていないだろう」と感じた投稿者が「つまらない」「俳優の演技が下手」と世界に発信されている感覚を忘れてつぶやいた、その一言が思わぬ形で制作側に届き、拡散されてしまう危険性を秘めている。

「最近の日本のテレビドラマは面白くない」。筆者はこれまで仲の良い友人からネットの意見を含め、様々なところでこの話を聞く。たしかに、80 年代 90 年代のテレビドラマに比べれば視聴率は大きく落ち込み、かつては 20% がヒット作の合格ラインだったのが 10% となり日常会話においても作品の話で盛り上がることは小学生だった頃より減ったように感じる。しかし、世の中の「面白くなくなった」という声の原因は、一部の視聴者の意見を気にし過ぎた制作側だと考える。最近の制作側は批判や炎上になることを過剰に恐れる。そのため、波風立たぬような大人しい作品を手掛ける。また、医療ドラマ、リーガルドラマ、刑事ドラマは 1 話完結で数年前からシリーズ化される作品を次々と生み出す人気ジャンルのため、1 クールに必ずあるほど偏りが生まれ新鮮味がない。映画と違い、テレビドラマの多くは放送と同時進行で撮影が行われることが多い。そのため、TBS 火曜ドラマの『逃げるは恥だが役に立つ』(2016)のように終盤にかけて視聴率や評価が上昇した作品は同時期に行われていた大河ドラマのパロディを差し込むなど視聴者と同時進行で需要に応じていく形もできるが、これが反対の否定的な意見が目立った作品だった場合は本来制作側が書きたい内容が書けないという影響生じているだろう。

作品に対する SNS の投稿には、純粹に作品を評価したり、気になった描写を深読みした

「考察する」投稿がほとんどだが、一方で評論とはまた違った過激な批判も多い。多様な価値観を受け入れようとする姿勢が広がりつつも、その姿勢を「表現の自由」と言い張り、攻撃的で人を貶めるような投稿も多く、このような誹謗中傷の投稿は制作側、また演じている俳優にも影響が及ぶ。原作がある作品をテレビドラマ化する作品も多くなり、放送される前にイメージしていた作風と異なった時、「イメージと違った」と批判する流れがあるが、全ては放送前に視聴者自身で期待していたりイメージしていたものがあつたからこそ、違った際に落胆してしまうのだろう。自分の物差しで作品を減点方式で捉えるのではなく、受け止める姿勢を持ち、フィクションの世界を楽しむべきだ。そして、制作陣に関しては SNS の意見に影響を受け止め過ぎず、届けたい作品を制作してほしい。

おわりに

インターネットが普及した前後で日本のテレビドラマにはどのような変化が起きたのか、第 1 章ではテレビの歴史や日本のテレビドラマの歴史や特徴について、第 2 章ではネット普及前後のヒット作の違いとして脚本家の変遷や視聴率重視から TVer の再生回数重視へと変化したこと、そして第 3 章は現在最も支持されている脚本家宮藤官九郎と野木亜紀子の作風の特徴やなぜ支持されるのかまとめ、第 4 章では SNS の影響力と制作の変化についてまとめた。ヒット作の定義について、昔のヒット作の定義が視聴率の高さだったことに対し、現在は情報媒体の多様化によりテレビの視聴率が以前よりも獲得することが難しくなり、SNS での評価や無料見逃し配信サービス TVer の再生回数を重視する流れへと変化していると論じた。また、インターネット普及前後では SNS に寄り添ったテレビの姿勢が印象的で、タイパへ影響されたように OP 映像と ED 映像の短縮や公式アカウントの存在意義、そして懸念点として SNS による意見に左右される制作陣について論じた。

SNS で様々な視聴者がドラマ評論家となり、作品が面白いかどうか評価をつけられるようになった。「考察ブーム」が定着し、多くの作品で一般の視聴者からの気づきが綴られた投稿を読むと、筆者が見逃してしまったり考えもしなかった気づきを与えてくれ、色々な見方をする人がいるのだと投稿を読むのは学びにも繋がる。しかしそういった投稿ばかりではなく、過度に出演者や制作陣を非難する投稿も多く、炎上を恐れる制作陣は最近の人気ジャンルドラマばかりを描くようになり、マンネリ化も指摘されている。コンプライアンスや製作費が減少したことも大いにあると考えるが、これからは制作陣が SNS の一部の意見に左右されずに新たなテレビドラマの魅力に気づける作品が制作されることを期待したい。

参考文献

- 宇佐美毅、2012、『テレビドラマを学問する』中央大学出版部
- 岡室美奈子、2024、『テレビドラマは時代を映す』ハヤカワ新書
- 小田慶子 佐藤結衣 田幸和歌子 成馬零一 西森路代 藤原奈緒 横川良明、2021、『脚本家・野木亜紀子の時代』株式会社 blueprint
- 宮藤官九郎、2013、『NHK 連続テレビ小説「あまちゃん」完全シナリオ集 第1部』株式会社 KODOKAWA
- 宮藤官九郎、2013、『NHK 連続テレビ小説「あまちゃん」完全シナリオ集 第2部』株式会社 KADOKAWA
- TV ガイドアーカイブチーム、2020、『テレビドラマオールタイムベスト 100』株式会社東京ニュース通信社
- 成馬零一、2021、『テレビドラマクロニクル 1990→2020』株式会社 PLANETS

インターネット文献

- NHK、朝ドラとは | 朝ドラ 100 | 番組 | NHK アーカイブス(最終閲覧：2024年12月4日)
<https://www.nhk.or.jp/archives/bangumi/special/asadora/about/index.html>
- 、大河ドラマとは | 大河 60 | 番組 | NHK アーカイブス(最終閲覧：2024年12月4日)
<https://www.nhk.or.jp/archives/bangumi/special/taiga/about/>
- 、【日本の朝を活気づける！】男性が主人公の“朝ドラ”特集 | 番組 | NHK アーカイブス(最終閲覧：2024年12月4日)
<https://www2.nhk.or.jp/archives/articles/?id=C0011125>
- GQ MEN OF THE YEAR 2013、ストーリーは揺るがなかった——脚本家・宮藤 官九郎(最終閲覧：2024年12月14日)
<https://www.gqjapan.jp/life/business/20131224/kankurou-kudou>
- 女性自身、『あまちゃん』“前髪クネ男”プロデューサーは古田新太(最終閲覧：2024年12月14日)
<https://jisin.jp/entertainment/entertainment-news/1609660/>
- TVer INC、[TVer] 2024年7月の月間ユーザー数過去最高4,000万 MUB を記録 過去最高記録となる月間再生数4.8億回、コネクテッドTVにおける再生数1.5億回を突破 パリ 2024オリンピック™や7月期ドラマが好調(最終閲覧：2024年12月10日)
<https://tver.co.jp/news/20240815.html>
- TBS テレビ、『空飛ぶ広報室』(最終閲覧：2024年12月15日)
https://www.tbs.co.jp/soratobu-tbs/interview/interview05_04.html

———、『ライオンの隠れ家』(最終閲覧：2024年12月15日)

https://www.tbs.co.jp/lionnokakurega_tbs/

ドラマ視聴率速報・ドラマ、歴代ドラマ高視聴率ランキングベスト40(最終閲覧：2024年12月7日)

https://doramanet.net/sp/index_rank/best30

ビデオリサーチ、ドラマ高世帯視聴率番組(最終閲覧：2024年12月10日)

https://www.videor.co.jp/tvrating/past_tvrating/drama/01/post-2.html

———、NHK大河ドラマ(最終閲覧：2024年12月10日)

https://www.videor.co.jp/tvrating/past_tvrating/drama/03/nhk-1.html

———、NHK朝の連続テレビ小説(最終閲覧：2024年12月10日)

https://www.videor.co.jp/tvrating/past_tvrating/drama/02/nhk.html

フジテレビ、『silent』(最終閲覧：2024年12月14日)

<https://www.fujitv.co.jp/silent/news/news10.html#:~:text=%E3%80%8Esilent%E3%80%8F%E3%81%AE%E8%A6%8B%E9%80%83%E3%81%97%E9%85%8D%E4%BF%A1%E3%81%8C,%E5%A4%A7%E8%A8%98%E9%8C%B2%E9%81%94%E6%88%90%E3%81%97%E3%81%BE%E3%81%97%E3%81%9F%EF%BC%81>

MARKETING CREATIVE アレドレ、五社協定が創りあげた「銀幕のスター」から現在のスターのあり方(最終閲覧：2024年12月4日)

https://www.aredore.jp/wp/inspiration_d09/

学ぼう！スマートライフ、テレビの歴史とヒミツ(最終閲覧：2024年12月4日)

<https://shouene-kaden.net/try/kaden/tv.html>

参考映像

TBS公式YouTube、パパ(#向井理)と離れたくないライオン(最終閲覧：2024年12月16日)

<https://www.youtube.com/shorts/JytV3lvAVLE>

———、ライオンとみっくん楽しそうでなにより(最終閲覧：2024年12月16日)

<https://www.youtube.com/shorts/3Bqt5XuHl18>

参考テレビドラマ作品

※自宅録画、TVerの配信含む

『HERO』(2001)

『GOOD LUCK!!』(2003)

『プライド』(2004)

『花より男子』(2005)

『のだめカンタービレ』(2006)

『コード・ブルー-ドクターヘリ緊急救命-』(2008)
『JIN-仁-』(2009)
『マルモのおきて』(2011)
『家政婦のミタ』(2011)
『半沢直樹』(2013)
『信長協奏曲』(2014)
『天皇の料理番』(2015)
『逃げるは恥だが役に立つ』(2016)
『初めて恋をした日に読む話』(2019)
『恋はつづくよどこまでも』(2020)
『MIU404』(2020)
『天国と地獄～サイコな2人～』(2021)
『オールドルーキー』(2022)
『silent』(2022)
『西園寺さんは家事をしない』(2024)